

## モスクワ孫逸仙大学における 蔣経国の苦恋と政治生活

中 村 達 雄\*

### はじめに

蔣経国は1925年、五・三〇事件を頂点とした反帝国主義愛国運動に身を投じることで、幼少年期に浙江省奉化县溪口镇で受けた父親蒋介石の庭訓を乗り越え、みずからの進む道を模索した。五・三〇事件は蔣経国を学生デモ隊の積極分子に押し上げ、そのことが原因となって上海浦東中学を除籍処分になる。蒋介石は経国を呉稚暉が北京に創立した海外補修学校に押し込んだが、蔣経国はここでも中国共産党北方区委員会の李大釗、趙世炎らが発動した北京5万人反帝示威運動に加わり、新興の共産主義国家ソ連に急接近していく。同年10月、蒋介石の同意を取り付けた蔣経国は、孫中山を顕彰してモスクワに創立されることになった孫逸仙大学に第1期生として留学し、以後12年間、ソ連に留め置かれた。

蔣経国がソ連に滞在した12年間をあつかった先行研究としては、Jay Taylor, *The Generalissimo's Son*, Harvard University Press, 2000, 茅家琦『蔣経国的一生與他的思想演变』（台湾商務印書館，2003年），余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」『台湾国立中央研究院近代史研究所集刊』（第29期，民国87年6月）などがある。前2書はソ連崩壊前の旧史料に依拠したことによる資料的な制約があり、蔣経国の事跡に不明な点が多い。余敏令論文はロシアが開示しはじめた新史料を使った意欲

---

\* 日本・東アジア文化研究分野 博士後期課程在学中

的な論考だが、本論が目的とする蔣経国の孫逸仙大学における恋情と、それが上海クーデターに翻弄され破綻していく軌跡、およびその後の留ソ期における政治生活を細部にわたって検討したものとはなりえていない。その意味で、本稿は余敏令論文を補完し、記述をさらに全面化する狙いがある。

本論の第1節は、馮玉祥の長女、弗能との恋が、モスクワにも押し寄せた4・12上海クーデターの大波に翻弄され、政治化し、破綻していく軌跡を検討するとともに、急激に悪化する中ソ関係の狭間で、クーデターを発動した「反革命の大罪人」蒋介石の子息として苦悩する経国の意識の起伏を考察する。

第2節では、12年間の留ソ期間中を通じて経国を苛め抜いた中共モスクワ支部の王明（本名：陳紹禹）とその一派「28人のボルシェビキ」が孫逸仙大学に台頭する過程を敷衍し、同大の国民党系留学生をパニックに陥れた「江浙同郷会」事件の経過をたどる。あわせて、孫逸仙大学入学を期に経国がトロツキー派に与し、左傾していく過程を明らかにするとともに、ソ連共産党への入党から党籍を剥奪されるまでの政治生活を検討する。

## 第1節 上海クーデターと蔣経国のアイデンティティ・クライシス

蔣経国は留ソ期間中の1935年3月、ウラル重機械工場で副工場長だったとき、孤児で職工のファイナと結婚し、長男アラン（Alan＝孝文）をもうけている。ソ連時期における経国の人物研究では、異性との係りあいについてファイナを中心にして語られてきた。ところがソ連崩壊後にロシアが一部の情報開示に踏みきったことで、経国の孫逸仙大学時代における恋情が徐々に明らかになりつつある。馮玉祥の長女、馮弗能との

恋の軌跡である。二人の恋は1927年に蒋介石が発動した4・12上海クーデターにゆさぶられ、政治化して破局を迎えた。つまり、当時、モスクワの小中国ともいえた孫逸仙大学にも深刻に波及した上海クーデターの大波がソ連共産党内におけるスターリンとトロツキーの路線闘争に収斂し、そうした政治環境の中で蒋経国と馮弗能の恋情がスポイルされていったのである。本節ではこれまで断片的にしか研究されてこなかった蒋経国と馮弗能との関係に焦点を合わせ、2人の恋が上海クーデターをきっかけにして政治化し、破綻していく過程を明らかにする。

## 1, 政治化した恋情

馮玉祥の長男洪国、長女弗能、次女弗伐の兄妹は、1926年3月末、馮玉祥夫妻とともにモスクワへ避難した<sup>1</sup>。途中、包頭を經由して庫倫（現ウランバートル）に達したとき継母の李徳全が産気づいて洪光（3歳で夭折）を産んだため、3兄妹は両親を残してソ連人の付き添いとともに先にモスクワへ向かった。馮玉祥夫妻は庫倫で産後を養い、遅れて5月9日にモスクワ入りしている。洪国と弗能はまもなく孫大に入学し、妹の弗伐は12歳になったばかりで年齢的に入学が叶わず、航空機製造工場ですぐに学徒工になった<sup>2</sup>。

馮洪国と馮弗能が孫逸仙大学に学籍登録されたのは5月19日のことで、中国からさみだれ式に来ソしていた国民党幹部子弟枠の第1期留学生に含まれる。弗能の学籍番号は294番、洪国は295番だった。孫大には前年末の12月23日までに189名の中国人留学生が入学手続きを済ませて

- 
- 1 馮玉祥は三・一八惨案後、奉直連合軍（張作霖と呉佩孚）の締め付けを避けて、家族をともないソ連に避難した。サンケイ新聞社『蒋介石秘録7』（サンケイ出版、昭和51年）39頁。
  - 2 余敏令「俄国档案中的留蘇学生蒋経国」『中央研究院近代史研究所集刊』（第29期、民国87年6月）112頁の注22参照。

おり、蔣経国はこのグループに入っている。

蔣経国は呉稚暉が北京に創立した海外補習学校時代、馮洪国と同窓だった。それはモスクワ留学の許可をもらいに広州の蒋介石を訪ねたとき、「素晴らしいことです。でも1人でそんな遠い国に行くなんて、まだ若すぎないですか」と蒋介石の2番目の妻陳潔如が心配すると、「心配いりません、馮玉祥將軍の息子も一緒です。お互いに助け合います<sup>3</sup>」と経国が応えているところからも明らかである。革命の聖地モスクワで蔣経国と再会した馮洪国は、一緒に入学した妹を紹介し、このとき、二人は知り合った。蔣経国16歳、馮弗能15歳、孫大では最年少の高級軍人子弟のカップルだった。

馮弗能のロシア名はニジダノワ、孫逸仙大学では評判の美少女だった。ただ政治的な自覚は高くなく、勉強も熱心とはいえなかったようだ。同じクラスの男子学生は「ニジダノワは、ただのお嬢様にすぎなかった」と冷淡である。そんな彼女を中国に返そうという動きがあった。それに対して、馮弗能は蔣経国と関係してそれに抵抗した、と云われる<sup>4</sup>。

ロシアが開示した資料は、弗能を経国の配偶者として記録している。蔣経国のソ連における軌跡を描いた記録映画『皮膚を取り換えた男』が、90年代のロシアで製作された。そこでも、弗能は経国の妻として描かれている。1926年にソ連で採択された新婚姻法は「事実上の婚姻」を認め、同棲、子供の共同扶育、あるいは第三者の証言があれば婚姻関係を有していると判断された<sup>5</sup>。蔣経国と馮弗能には、おそらく同棲関係が生じていたのだろう。

留学生は大学の教職員以外にロシア人との交際は少なく、ほとんどが

---

3 陳潔如著、汪凌石訳『陳潔如回憶錄』（台北・新新聞周刊，民国81年）136頁。

4 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」112～113頁。

5 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」113頁参照。

中国人コミュニティの中だけで生活を送っていた。孤立した集団内での密接な人間関係は、親密な交友関係（男女間では多くのカップルが生まれた）が生じたとともに、激しい人的対立や派閥闘争を生み出す土壌ともなった<sup>6</sup>。孫大留学生どうして結婚した者には、王明＋孟慶樹，楊尚昆＋李伯釗，沈沢民＋張琴秀，谷正鼎＋皮以書，邵力子（聴講生）＋傅学文ら多数のカップルが挙げられる。ロシア人との結婚に至った者には、李立三，師哲，唐有章，そして本論の主人公である蔣経国らの名前を挙げることができる。ロシア人との結婚は，さまざまな事情で10年以上もソ連に滞在した者，に限られている<sup>7</sup>。

蔣経国と馮弗能の交際は，結果的に苦恋に終わった。それは弗能の側からいえば，共產主義青年団という政治的自覚を重んじる組織のハードルに阻まれた結果であった。一方，経国の側からすれば，父親蒋介石が発動した上海クーデターの荒波から如何に自分の身を護るのか，という苦悩の中で下された決断だったといえる。

当時，共產主義青年団を含め，中国共産党の組織内では非共産党員との男女関係は好ましく思われていなかった。そうした雰囲気の中で蔣経国は馮弗能に何度も共青团への加入を勧めているが，弗能は興味を示さなかった。むしろ兄の洪国のほうが積極的で，1926年秋には入団している<sup>8</sup>。弗能に共青团への参加を真剣に考えさせたのは，蒋介石が上海で発動した上海クーデターだった。この事件をきっかけにして，孫逸仙大学に在籍する国民党系の学生は自らの政治的な立場を鮮明にする必要に迫られた。馮弗能は蔣経国に宛てた手紙に「学校生活の一切が政治化し

---

6 土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』（中央大学出版部，1999年）194頁。

7 前掲土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」214頁注71参照。

8 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁参照。

てしまいました」としたため、政治活動に加わらなければ安泰な道はないので入団して学習したい、と訴えている<sup>9</sup>。せっかく積極性を見せ始めた弗能の願いは共青团幹部に聞き入れられず、入団申請は却下された。この時期、南京国民政府に与していた馮玉祥の長女という地位、そしてこれまで一貫して政治に対する無関心を貫いてきた弗能の態度が申請却下を招いたことは間違いない。

蔣経国と馮弗能の苦恋については、もうひとつのエピソードを敷衍しておくべきだろう。それはロシア名をパイコフと名のる中国人留学生が経国に宛てた書簡<sup>10</sup>に示されている事実である。それによれば蔣経国は1927年12月、馮弗能との関係を清算した。同年4月、孫逸仙大学を繰り上げ卒業し、赤軍第1師団に学兵として入団していた経国が休暇でモスクワに戻り、弗能との関係を断絶したのだという。共青团員ではない弗能と経国との交際を心配していたパイコフは書簡に「良いことだ、私の真の友、真の同志よ！どのように大きな決意と毅力で決心したことか。この決断は苦しみをともなうと思うが、私は関係を断絶したことを無条件で正しいことだと考えている（中略）馮との関係は間違いだったのだ。彼女がいつか共産主義者に成長することを期待して（中略）君は今後、会話に注意し、読書を多くすることが気晴らしの方法だと思う。もしも性の欲求が急であるなら、別の女性をさがすのもよし」<sup>11</sup>としたためている。

---

9 『弗能が経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／101頁、1927年9月24日）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁より再引。

10 『パイコフが経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／93頁、1928年（推測））。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁より再引。

11 前掲『パイコフが経国に宛てた書簡』前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」115頁より再引。

近年開示されたソ連国家政治保安部（GPU）の資料によれば、蔣経国はパイコフの書簡に先立つ1927年7月、当局に馮弗能との夫婦関係を解消したことを証明する「自白書」を提出した。その中で経国は「馮弗能には思想問題があります。彼女は国民党が派遣した監視であり、自分に影響を与えて改造を試みている」と語っている<sup>12</sup>。その2ヵ月後、弗能は経国に書簡をしたため「あなたが両思いの病に罹った（弗能以外の女性の面影を心に宿したことを指す）、と左権<sup>13</sup>が話していました」<sup>14</sup>と経国の心変わりをなじっているのです。自白書が書かれ、蔣経国が馮弗能との関係を清算した事実はたしかにあったのだろう。政治的な自覚が低く、政治に無関心なノンポリの弗能が、国民党が派遣した経国の監視役であり、経国に影響を与えて改造を試みるはずがない。蔣経国の荒唐な作り話だ。なぜ、蔣経国はそのような作り話の自白書を書いたのか。蒋介石の上海クーデターが原因して、微妙な立場におかれた経国の保身から出てきた行動にちがいない。国民党高級将軍のお嬢さんで、政治的に自覚の低い馮弗能と決別し、共産主義者であることを強力にアピールする必要があったのである。

---

12 謝忠良，王健民，童清峰「KGB 档案重繪青年蔣経国」『亞洲週刊』（香港，1998年1月26日～2月8日合併号）30～33頁。

13 左権（1905～1942年），号は叔仁。紀権とも称した。湖南醴陵の人。黄埔軍官学校第一期生，1925年に中国共産党に入党。蔣経国と同じ一期生として孫逸仙大学に留学した。卒業後，モスクワの軍事学院に転じて1930年に帰国。八路軍副参謀長などの要職を歴任し，1942年，山西省で抗日作戦中に戦死した。

14 『弗能が経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター，総ファイル530／目録4／ファイル49／116頁，1927年9月27日）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」114頁より再引。

## 2、蔣経国の苦境

中山艦事件<sup>15</sup>後、国民党中央道派や右派の多くは蒋介石がソ連や共産党と完全に縁を切るものと期待した。しかし、蒋介石は孫中山が果たせなかった北伐を完遂するには、まだ、ソ連の軍事援助が必要なことを知悉していた。孫中山が受け入れた「聯ソ・容共・扶助工農」の三大政策以来、その巧みに打算を隠した親ソ姿勢から、ときには赤い將軍とまでよばれた蒋介石が明確な反共に転じたのは、1927年3月10日、武漢政府<sup>16</sup>の国民党左派および国民党内の中共黨員が主導した三中全会以後のことである。軍務で出席が間に合わなかった蒋介石ら首脳を抜きにして、国民党顧問のボロディンが会議の開催を急がせた<sup>17</sup>。毛沢東は「1人や2人のために待つ必要などない<sup>18</sup>」とボロディンを支持した。この会議で蒋介石は欠席のまま国民党中央執行委員会議長ポストばかりか、軍事評議会議長、軍幹部長の職さえも剥奪された。武漢政府の使者として九江までこの報せを伝えに来た故廖仲愷の夫人何香凝が帰ったあと、極度の怒りに襲われた蒋介石はピストル自殺を図ろうとした、と陳潔如は回想している<sup>19</sup>。その後もボロディンをはじめとする国民党左派や中共が

---

15 1926年3月19日、国民党顧問のボロディンがソヴェート軍事顧問団員のN.V.キサニカに命令し、蒋介石を中山艦でウラジオストクまで拉致し、なきものにしようと企てた事件。中山艦は1922年6月、陳炯明の反乱を逃れて孫中山が逃げ込んだ永豊鑑のことで、孫中山の死後、蒋介石はこの船を中山艦と改名して旗艦としていた。

16 国民党および国民政府は1926年11月9日の南昌攻略を契機に漢口への移動を窺い、同月26日に武漢遷都を決めた。外交部長がエヴゲーニー・チェン（陳友仁）、財政部長が宋子文で、1927年4月からこれにフランス帰りの汪精衛が主席として加わり、短期間だが「寧漢分裂」とよばれる時期が生じる。

17 秦孝儀他編『総統蔣公大事長編初稿卷一』（財団法人中正文教基金会、1978年）142頁。

18 前掲サンケイ新聞社『蒋介石秘録7』78頁。

19 前掲陳潔如『陳潔如回憶錄』207～210頁参照。



起こした南京事件など反蔣の企ては続く。蒋介石は白崇禧軍に命じ、同時に辛亥革命後に陳其美を通じて闇の交流が続いていた「青幫三大亨」の杜月笙ら黒社会の支持を得て上海で全面「清党」（4・12上海クーデター）を発動して共産勢力の一掃に乗り出した。これに続く15日には広州で国民革命軍留守総司令の李濟琛が反共クーデターを起こし、北京を支配していた張作霖はこれよりさき列国公使団黙認のもとでソ連大使館を急襲し、李大釗を逮捕処刑していた。清党の勢いは浙江、福建、広東、広西、安徽、四川、そして北京の各省市にまでおよんだ。

上海クーデターをはじめとする全面的な清党は国共関係に終止符を打ち、その後の北伐と国民党の活動に明確な方向性を与えた。蒋介石は南京国民政府を樹立（4月20日）し、やがて武漢国民政府も共産黨員放逐（7月）に動いて寧漢合体（9月）が実現し、一定の市民権を得ていた共産勢力は地下に暗流していった。その波紋は国内にとどまらず、当然のことながら蔣経国が学ぶモスクワの孫逸仙大学にも波及した。スターリンとトロツキーが中国革命をめぐる激しく論争し、その衝撃波が中国人留学生を主体とする孫大を激しく襲ったのだ。

孫逸仙大学はソ連共産党と国民党の多頭管理で、ソ共は同時にコミンテルンと中国共産党を代表していた。国民党のなかには中共党籍を留保しながら個人の資格で入党し、共産思想を持ったものが多数存在した。武漢と南京の間で争われたのと同じことが、孫大でも起こった。モスクワにおいてそれまで北伐の英雄だった蒋介石は、上海クーデターを境にソ連と中国の合作関係を破壊した「反革命の大罪人」に立場が急落する。これにともない孫大の、とくに国民党中道あるいは右派に与する留学生の政治的な立場が一気に危うくなったのである。その中でもとくに「反革命の大罪人」の子息であった蔣経国は、もっとも困難な立場に立たされた。上海クーデター直後の孫大における自らの状況について、蔣経国

は次のように回想している。

北伐軍が上海を攻略したニュースがモスクワに伝わると、新聞は相次いで号外を出し、民衆はそこそこで（祝賀の）デモを繰り広げた（中略）しかし数日後、上海でもうひとつの事件が発生し、父が共産党とソ連に対する態度を一変させたニュースが伝わった。父が反共・反ソの立場をとったというのだ<sup>20</sup>。

蔣経国は当時の状況をごく控えめに記述しているにすぎない。回想は続く。

上海事件発生後、私は相当の時間を使ってソ連と中国の政治事件を詳しく考察してみた。中国の1927年における政局の動揺の主な原因は中共の指導が無策で、政策に英知が見られず周到でなかった、という結論に達した。ソ連に関する考察も行ない、社会主義はソ連で成功せず、農民は「プロレタリア独裁」に立ち上がって反対するだろう、と考えた<sup>21</sup>。

回想録で上海クーデターに言及した部分はこれだけである。他で伝えられている事実と著しくかけ離れているので、周辺資料を使い、当時の状況を史実に即して再現してみよう。

事件の詳細が入ると孫逸仙大学では学生集会が開かれ、留学生たちは「帝国主義の走狗、反革命の蒋介石とその一味が党の規律に背いて上海

---

20 蔣経国「我在蘇聯的日子」克萊恩（Cline）著、聯合報國際新聞中心訳『我所知道的蔣経国』（聯経出版、民国79年）222頁。

21 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」218頁。

の革命的労働者を屠殺した（中略）反革命の蒋介石とその一味に対する闘争を堅持し、我々が最後の勝利を勝ち取るものと確信する<sup>22</sup>」という電報を武漢国民政府に送った。全学糾弾集会では蔣経国が真っ先に演壇に駆け上がって「打倒蒋介石！」のスローガンを叫び、ロシア語で「私はいま蒋介石の息子としてではなく、共産主義青年団の子として発言します」と前置きして次のように演説した。

蒋介石の裏切りは決して意外なことではなく、口先で革命を称揚していたときすでに革命を売り渡し、一心に張作霖、孫伝芳の汚濁に合流しようとしていたのです。彼の革命事業はすでに終わりました。革命の観点からすれば死刑に値します。革命に背いたその刹那から、彼は中国プロレタリア階級の敵になりさがりました。過去において、彼は私の父であり、革命の良き友人でありましたが、反革命の陣営に加わったいま、彼は私の敵になったのです<sup>23</sup>。

これは蔣経国の「反蔣声明」として、タス通信を通じてソ連国内はもとより、全世界に配信された。蒋介石も、当然、これを目にしたはずである。上に引用した経国の回想録の内容との乖離に驚かされる。父親に対するなんと激越な挑戦状であることか。

蔣経国はその少青年期、主に三つの意識に支配された。それは第1に父親蒋介石から叩き込まれた溪口（中国の伝統教養＝父親蒋介石への服従）意識、第2に上海（父親からの離脱＝自我の芽生え）意識、そして

---

22 『プラウダ』第88巻3620号、1927年4月19日。張日新他著『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002年）34頁から再引。

23 *The People's Tribune (HanKow)* 24 April, 1927, 朱小平他著『蔣氏家族 上』（中国・中国文史出版社、2001年）319頁より再引。

第3のモスクワ（共産）意識であり、蔣経国にとっての激動した各歴史段階で、そのときどきの主要意識が他を統制しバランスを保ってきた。ところが独立独行の異郷の地で父親の蒋介石が発動した上海クーデターに遭遇し、均衡を保っていたこれら複数の意識が相互に激しい短絡関係に陥ってしまったのだ。今まで絶対的な存在として君臨してきた父親が、こともあろうに自分が憧れて留学したソ連と祖国中国との関係を破壊してしまったのである。畏敬した父親<sup>24</sup>が「反革命の大罪人」になってしまったのだ。このことは蔣経国を意識の危機（アイデンティティ・クライシス）とでもよぶべきパニック状態に陥れた。危機の中で経国は、本能的にパニックから抜け出ることを考えた

蔣経国は孫逸仙大学に入学後、わずか数週間で共産主義青年団に入団している。一般の留学生なら、共青団員という資格が免罪符になって上海クーデターの大波をやり過ごすことができたにちがいない。しかし経国は上海クーデターを発動した張本人蒋介石の子息であったために、もっと大きな効力のある免罪符が必要だった。それが全学糾弾集会で真っ先に演台に駆け上がって「打倒蒋介石！」のスローガンを叫ぶことであり、タス通信を通じて「反蔣声明」を出すことだった。回想録で言及しなかったのは、そここのところに触れなくなかったのであり、少なくとも回想録の執筆時には父親が敵だったなどとは思っていなかった。

上海クーデターは、スターリンとトロツキーの路線（権力）闘争の真只中で起こった。スターリンは蒋介石が発動した上海クーデター後も、まだ、中国共産党と国民党左派の協力を継続させることに意義を見出していた。一方、トロツキーは中国共産党員が国民党から直ちに脱党して、中国にソヴェートを作るよう要求した。賀竜、葉挺、周恩来、朱徳、張

---

24 前掲陳潔如『陳潔如回憶錄』137頁参照。

国燾らが合流して発動した南昌蜂起（7月31日夜半）<sup>25</sup>、毛沢東の長沙における秋収蜂起（9月8日）、彭湃や惲代英らの陸豊、海豊における中国最初のソヴェート政権樹立——広東コミューン（12月11日）——は一瞬の輝きを放ちながらもことごとく挫折していく。ソ連国内の路線闘争は激変する中国情勢に直面して統一した方向性を見出せないでいたが、孫逸仙大学の学生、とくに共産党・国民党左派系以外の留学生に対する当局の態度は急冷し、送還・帰国問題が急浮上する。ここでまた経国の回想録に戻ろう。

当時、中共駐モスクワ代表団は、私の帰国は残留よりもっと良くない、と判断した。1927年4月、中山大学を卒業した私は友人たちと帰国を願い出た<sup>26</sup>が、私だけは許可されなかった。（中略）幾人かの中共黨員は「蔣経国を帰せば、蒋介石の有力な助手になるに違いない。彼をソ連に留め置くべきだ」と主張した。<sup>27</sup>

上海クーデター後、国民党籍を有する留学生は帰国・送還、モスクワに残留して共産党・共青团に加入、あるいは投獄もしくはシベリア追放と明暗が分かれた。このことについてはクーデターの翌年夏、孫逸仙大学に留学した中共黨員の張国燾が「そのころ、これらの純粹国民党員は、中共に走った者を除き、ある者は送還・帰国し、またある者はシベリアに送られて苦役に従事した<sup>28</sup>」と証言している。それによれば、中共に

---

25 南昌蜂起は一般的には8月1日に起こったとされるが、前日夜半から決行されたので、本論では7月31日としている。

26 谷正綱、銓文儀らは、このとき帰国している（李敖「蘇聯時期的蔣経国——訪蔣伝作者江南」『蔣経国研究』李敖出版社、1987年、119頁参照）。

27 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」225頁。

28 張国燾『我的回憶（二）』（明報月刊出版社、1973年）795～796頁。

与した者は送還，あるいはシベリア送りを免れたのである。

上の回想録のように，蔣経国は本当に帰国を願い出たのだろうか。上海クーデターが発生した当時，中国共産党はモスクワに正式な代表団を置いていない<sup>29</sup>。孫大で中共党員の王明が権勢を振るい始めたのは，ミフの案内役兼通訳として訪中し，信頼を勝ち得てモスクワに戻った同年夏以降のことである。蔣経国に強く残留を強制できた中共党員は見当たらない。国民党との関係維持を推進したスターリンの意を受けたソ連当局が，経国を人質にとって蒋介石との交渉の切り札に使いたかった，という事実はあったとしてもおかしくない。一方で経国の気持ちになって考えてみると，激情か左傾，あるいは保身から父親を革命の敵と公開批判してしまったので，そう簡単には帰れない。また，上海クーデター後はその思い切った行動から良くも悪くも「新聞人物」として注目され，あの全学糾弾集会で切った大見得を翻してさっさと帰国するわけにもいかなかったという事情もあった。このように膠着した状況のなかで，蔣経国は思い切って残留し，共青团員の身分を利用して学業に専念し，ほとぼりを冷ますという保身の道を選択した。

上海クーデターから1ヵ月余が経過した5月18日，コミンテルン第8回総会が開催され，スターリンは農民運動を中核とした中国革命を実行するために国民党の共産化を指示する密電をボロディンに送った<sup>30</sup>。その電文の内容を知った汪精衛は，共産党員が国民党の枠組みの中で国民革命に協力するという孫中山の容共精神はすでにソ連に踏みにじられたと判断して，7月15日，共産党員を国民党から追放することを決めて反共に転じ，寧漢合流に方向転換した。同月26日，国民党中央執行委員会

---

29 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」117頁。

30 ボリス&ドミートリー・スラヴィンスキー著，加藤幸廣訳『中国革命とソ連』（共同通信社，2002年）164～165頁参照。

は孫逸仙大学とのすべての関係を断絶する声明を発し、8月に239名の留学生がこれに従って帰国の途についた。50人は残留を望み、共産党もしくは共青团に加わった。同年12月14日、蒋介石の南京国民政府はソ連との外交関係を断絶する。前述した馮洪国と弗能、弗伐の兄妹は、上海クーデターに際し馮玉祥が武漢国民政府から蒋介石側に寝返ったため、ソ連当局から厄介者扱いされて一時は人質同然の扱いを受けていたが、1928年5月25日、許されてウラジオストク経由で中国に帰国している<sup>31</sup>。

## 第2節 孫逸仙大学の紛争と蔣経国の政治生活

蒋介石が1927年に発動した4・12上海クーデターは、中共および国民党左派が画策した反蔣運動を敗北に導いた。それは国民革命を再編するだけにとどまらず、中国革命をはるか北方から操っていたソ連共産党、コミンテルン内の路線闘争における最も深刻な議論のひとつにもなった。単純化して云えば、スターリンとトロツキーの路線闘争以外のなにものでもない。本節はこの闘争と表裏をなして現象した孫逸仙大学の紛争と「江浙同郷会」事件、そして孫大在籍時とその後の在ソ連期における蔣経国の政治生活について検討する。

### 1, 大学紛争と王明一派＝「28人のボルシェビキ」台頭

孫逸仙大学の左派系留学生は上海クーデターに怒りを感じていたが、その気持ちを直接蔣経国にぶつけることはまれだった。清党後の政治的な不安定さは経国1人の身に限ったことではなく、孫大に在学する中国人留学生全般にいえることだったからだ<sup>32</sup>。そんな中で学友が危惧を感

---

31 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」117頁。

32 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」124頁参照。

じたのは、むしろ蔣経国とトロツキー派との関係だった。トロツキストは中共モスクワ支部からすでに「反動派」の烙印を押されており、その意味で周囲にとっては経国の思想が「正しい」のかどうかの方が重要だった。

学長を解任される前のラデックはトロツキー派の最重要人物で、孫逸仙大学は同派の大本営になっていた<sup>33</sup>。上海クーデター以前は、学内のトロツキー派の活動は学術討論、すなわち理論領域の争いの枠から逸脱することはなかった。しかしクーデター後、それはスターリンとトロツキーの激しい政策論争となり、孫大はその論争の大波をもろにかぶることになる。蔣経国は孫大入学以来、ラデックやその他の教員の影響を受けてトロツキー派に加わったのは間違いないが、経国がいつの時点から明確にトロツキー派に与するようになったかは明らかではない。トロツキー派の中における経国の役割は主にビラ撒き<sup>34</sup>などの基層活動で、本人が回想録で述べているように孫大トロツキストの中心人物<sup>35</sup>では決してなかった。10月革命の10周年式典で発生した「赤の広場事件」に関係して、大学当局から除籍処分になったトロツキー派学生のリストにも蔣経国の名前を見出すことはできない<sup>36</sup>。

蔣経国は「反革命の大罪人」の子であることが災いして中共モスクワ支部の監視が厳しくなり、以前は検閲こそあったものの郵送可能だった国際郵便を出せなくなり、「中国と完全に隔絶され<sup>37</sup>」てしまった。経

---

33 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」124頁参照。

34 Alexander Pantsov, *From Students to Dissidents*, pp.58-60, 63. 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」124頁から再引。

35 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」224頁参照。

36 『孫大会議 NO.9記録』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録2／ファイル26／108～110頁、1927年11月9日）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」125頁より再引。



国は1927年4月に孫逸仙大学を繰り上げ卒業した。当面、帰国も断念したので、赤軍を志願し、学兵としてモスクワ郊外に駐屯する第1師団に入団している<sup>38</sup>。ここで1年間ほど野戦術や幕営などを学び、成績が上位5人に入る優秀學員に選ばれ、レニングラードのトルマトコフ中央軍政学院（ブルンゼ陸大）に進学した。

ラデックは1927年12月に開かれたソ連共産党第15回大会で除名されてシベリア追放になり、その直後に蔣経国はトロツキー派から離れている。王凡西はこのあたりの事情について「ラデックは解任され、新学長はスターリン派の人物ミフになり、学内のトロツキー派学生の一部は事実上すでに退学、党から除名され、処刑を待つ運命にあり、一部は悔い改めて投降（その中には蔣経国もいる）していた」と回想している<sup>39</sup>。王がいうように、経国がラデック失脚直後にトロツキー派と袂を分ったことを、トロツキー派からの打算的な転向と見たむきも多かったようだ。この非難に対して蔣経国は「当時、まだ、自覚が高くなかった<sup>40</sup>」と言い訳している。トロツキー派に与していた留学生の多くが除名や処刑の憂き目に遭ったのに、なぜか経国は何らの追求も受けなかった。これは幸運などという偶然の産物ではなく、将来、蒋介石との交渉の切り札にしようとしたソ連当局と中共モスクワ支部にうまく泳がされていたものと思われる<sup>41</sup>。

---

37 蔣経国「我在蘇聯的日子」克莱恩（Cline）著，聯合報國際新聞中心訳『我所知道的蔣経国』（聯経出版，民国79年）225頁。

38 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集（記事年表上輯）』（行政院新聞局，1992年）34頁。

39 王凡西著，矢吹 晋訳『中国トロツキスト回想録』（柘植書房，1979年）50頁。

40 『トルマトコフ軍政黨員大会資料』（ロシア文献センター，総ファイル550／目録1／ファイル6／31頁，1929年11月2日）。

41 張日新他『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社，2002年）43頁。

トルマトコフ中央軍政学院のカリキュラムは3年制で、その間、教科書や日用品以外に毎月150ルーブルの生活費<sup>42</sup>が支給された。初年度は戦術、軍隊行政、運輸、地形学、大砲原理、軍隊政工などの科目を学んだ。2年生で軍事戦略、ロシア内戦史、西欧軍事史、ロシア共産党史が加わり、3年目には戦術・戦略に重点が置かれた。蔣経国の得意科目は戦術・戦略で、在学中に論文『遊撃戦術』を著している。軍事科目以外では政治学、経済学、哲学、とくに唯物弁証法をよく勉強した。経国以外の学生は1人残らずロシア共産党員だったので、党員会議の際には1人だけ出席が許されず仲間はずれにされた。2年生のとき、中共の推薦を受け、やっとロシア共産党の候補党員になることができた<sup>43</sup>。

蔣経国は1930年5月、三年間の課程を終えてトルマトコフ中央軍政学院を卒業する。再度の帰国願いはふたたび却下され、今度は正規兵として赤軍入隊を希望した。しかし中共の妨害に遭いそれも認められず、6月末になってモスクワにあるレーニン大学<sup>44</sup>の中国学生訪問団の副指導員になった。これは留学を終えた中国人留学生在が帰国する前にソ連国内を視察旅行する際に通訳などをしながら随行する仕事で、コーカサス<sup>45</sup>やウクライナを訪れ「社会主義建設の成果」を実見することができて有

---

42 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」227頁。

43 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」227～228頁参照。

44 レーニン大学の前身は孫逸仙大学。孫大は蔣経国が副指導員として赴任する直前、その使命を終えて廃校になった。

45 この旅行でコーカサス（グルジア）のチフリス付近に立ち寄った際、経国はスターリンの母親と会見している。そのときスターリンの母親が「父親というものは必ず子供を愛しているものです。子供もまた、父母を愛すべきなのです」と語ったことを回想録に書いている。これは帰国を許されない蔣経国がスターリンの母親との会話という形式で父母への気持ちを吐露したメタファと見ることができる（蔣経国「我在蘇聯的生活」蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集・第一冊』行政院新聞局，1992年，35頁参照）。

意義だった<sup>46</sup>と回想している。

時期は前後するが、ラデックはコミンテルン第5回大会<sup>47</sup>でトロツキーを支持し、それが原因してスターリンからロシア共産党中央委員とコミンテルンの指導的地位を解任され、避難的に孫大の創立に係わり初代の学長に任命されたのだった。ラデックは管理職にありながら同時に教壇にも立ち、トロツキーの国際主義の立場に立脚して中国革命運動史を講義し、スターリンとブハーリンの中国政策を批判した<sup>48</sup>。孫逸仙大学の留学生はラデックがトロツキー派の重要人物であり、また、スターリンの一国社会主義よりもトロツキーの国際主義と永続革命の中に祖国中国を帝国主義から救済する可能性を見出し、トロツキー派を支持する者が多かった。こうしたなか、事態を重く見たスターリンは上海クーデター後の5月13日に孫大で学生と会談し、中国人留学生から提出された10項目の質問に答えるというかたちでラデックを始めとするトロツキー派の中国政策に批判を加えた<sup>49</sup>。

スターリンが学生と会談した6日後の19日、ロシア共産党は政治局会議を開き「孫逸仙大学にイデオロギー的に正しい教員を任用するため、大学教授要員の審査を行う」ことを党書記局に委任し、特にラデック学長とダーリンら教員の即時罷免を決議した<sup>50</sup>。ミフが就任するまでの中継ぎには、教務主任のアクーヤーが代理学長に任命された。

---

46 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」230頁。

47 ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編、村田陽一訳『コミンテルンの歴史上巻』（大月書店、1973年）301頁参照。

48 岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」『中国月報』Vol.46 No.4 (No.530) (中国研究所、1992年4月) 10頁参照。

49 イ・ヴェ・スターリン「中山大学の学生との会談」『スターリン全集』第九卷（大月書店、1953年）266～295頁。スターリンはこの会談で、武漢国民政府との間で予定されている急進的な土地改革、全ブルジョアジーを敵とするソヴィエトの樹立、国民党との絶縁に強く反対した。

ミフはこの年の1月、ロシア共産党中央委員会から宣伝工作者ミッションを率いて中国に派遣され、この後、「江浙同郷会」事件を捏造する孫大留学生出身（同年4月卒業）の王明（陳紹禹）<sup>51</sup>が案内役兼通訳としてミフに同行したことは前述した。両人は上海クーデター後の4月末、漢口で開催された中国共産党5全大会に出席し、7月に上海からハイラル経由モスクワに帰着している。ミフは漢口で王明を陳独秀に会わせ、王は中共の中央宣伝部で刊行物編集の仕事を紹介されたが、この処遇に不満で、4・12クーデター以後の国内情勢の激変にも不安を持ち、編集の仕事を早々に辞してミフとともにモスクワに戻った。

モスクワに帰ったミフは代理学長に就任したアクーヤー（教務派）が留学生から信頼され、人気を集めていることに脅威を抱き、党支部書記のシエドニコフを籠絡して教務派と支部局派の間に矛盾を作り出した。この対立関係に着目した王明は、両者の対立を解消して、さらにミフに孫大の実権を握らせる一石二鳥の妙案を考え出した。それは教務派と支部局派の両派に中立な第3勢力を味方につけ、同時に支部局派の暴走を防いでミフと王明の影響下に置いたあと、両者が連合して教務派を攻撃

---

50 BKK-II, no.210, c729. 土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』（中央大学出版部、1999年）199頁から再引。ラデックは1927年12月に開かれたロシア共産党第15回党大会で75人のトロツキー派とともに党を除名され、シベリアに追放された。

51 王明（陳紹禹、1907～74）、上海大学在学中に中国共産党に入党し、1926～27年、孫逸仙大学に留学した。1927～30年、モスクワで中国共産党モスクワ支部の活動に従事。1931年に中共の指導権を掌握し、1932～37年、コミンテルン東方部の中共代表としてモスクワに滞在した。38年に帰国（不在中、遵義会議で毛沢東に指導権を奪われる）し、抗日民族統一戦線の政策をめぐり毛沢東と激しく対立した。1956年、毛沢東に敬遠されてモスクワに避難。以来、帰国のメドが立たず、1974年にモスクワで客死した。

するというものだ。ミフはこの案に乗って支部局派を掌握するとともに教務派を打倒し、紛争を解決した功績で同年8月、アクーヤーを排斥して学長に昇進した。陰謀を編み出した王明は当然のごとくミフのお気に入りとなり、学長秘書とコミンテルン東方部の通訳を兼務し、孫逸仙大学の中共支部内に王明派を形成しはじめた<sup>52</sup>。王明は権力を掌握するに従い、当時顕著になりつつあったトロツキー派への圧力を強め、同時にみずからの政敵を追い落とすためにあれこれ画策し、4・12クーデター後に思想的な漂流状態に陥っていた孫大留学生の不安を煽って学内をパニックに陥れたのである。当時の王明一派を形容するひとつのエピソードがある。王明が中共モスクワ支部を代表して党員会議にひとつの決議案を提出したところ、100名以上いる党員の中で賛成したのは29人で、あとは全員反対だったことから決議案は否決された。これに腹を立てた王明が「ここにいる28人と2分の1人（徐以新は党員ではなかったので『半人前のボルシェビキ』とよばれていた）こそが真のボルシェビキである」と語ったことから、この当時の王明一派は「28人のボルシェビキ」<sup>53</sup>とよばれ、孫大留学生から恐れられた<sup>54</sup>。

---

52 前掲岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」11頁参照。

53 「28人のボルシェビキ」は資料によって若干の違いはあるが、おおむね以下の28人を指した。王明、張聞天、秦邦憲（博古）、沈沢民（茅盾の弟）、陳昌浩、王稼祥、陳原道、楊尚昆、何子述、汪盛荻、殷鑑、夏曦、李元傑、王盛榮、王雲程、孫濟民、盛岳、李竹声、朱子純、朱阿根、袁家庸、孟慶樹（王明の妻）、杜作祥（沈昌浩の妻）何克全、宋盤民、王宝礼、肖特甫、張琴秋の28人。以上のメンバー洗い出しは、トーマス・キャンペン著、杉田米行訳『毛沢東と周恩来』（三和書籍、2004年、39頁を参照した。

54 彭哲愚・嚴農『蔣経国在莫斯科』（民進書報社、1986年）17頁参照。

## 2, 「江浙同郷会」事件

蔣経国が1928年、トルマトコフ中央軍政学院に入学する前後、トロツキー派との交わりに終止符を打ったことは上述した。ちょうどそのころ、すでにレニングラードに移り住んだ経国にモスクワから1通の手紙がとどいた。手紙は孫逸仙大学の友人からで、冗談混じりに「今度、江浙同郷会を立ち上げることになり、君が会長に推挙された。以後、会員への経済的援助を惜しまないように」としたためられてあった<sup>55</sup>。これは孫大留学生よりも経済的にめぐまれていた経国への羨望と、仲間うちの気楽な戯れ心から書かれたものだった<sup>56</sup>。ところが経国と同室だった国家政治保安部（GPU）の秘密要員がこの手紙を発見し、中共モスクワ支部の王明に転送した<sup>57</sup>。これと同じころ孫大では毎週土曜日の夜、孫治方が自室に俞松秀、董亦湘、周達明ら同級生を集め、江蘇・浙江方言で大声を出しながら故郷の鍋をつついていた。これを聴きつけた学生会主任の王長熙が「彼らはまるで江浙同郷会を開いているようだ」と支部に報告した<sup>58</sup>。蔣経国がトロツキスト派から抜けたために批判の口実を失っていた王明はさっそくこれを材料に、経国が蒋介石の指示と資金援助で俞松秀、董亦湘、周達明、左権らとぐるになり、支部局とコミンテ

---

55 前掲彭哲愚・嚴農『蔣経国在莫斯科』17頁参照。

56 トルマトコフ軍政学院では教科書や日用品以外に毎月150ルーブルの生活費が支給された（前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」227頁参照）。このことは、また、1927年に溪口の母毛福梅が経国に送った金銭の使い道とも関係している。経国は母親が送金してくれたお金の中から40ルーブルを歯科治療費として朱茂榛に貸し、残りを友人たちとの飲食に費やした。このときの遊興を中共モスクワ支部の王明らが反ソ、反共団体の組織化と断定したことも経国が江浙同郷会事件に巻き込まれた原因のひとつに数えられる（前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」125頁参照）。

57 前掲彭哲愚・嚴農『蔣経国在莫斯科』17頁参照。

58 前掲岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」『中国月報』Vol.46 No.4 (No.530) 13頁参照。

ルンの離反を画策する「江浙同郷会」とよばれる反革命組織を作っていると触れまわり、経国をはじめとする反王明派を一掃しようと企んだ。

これが「江浙同郷会」事件とよばれるものである。

学長のミフもこの「事件」を利用して一気にトロツキー派の一掃を狙うことで、王明と利害が一致した。王はミフを動かして国家政治保安部（GPU）に「証拠の発見」を依頼し、折りしもモスクワで開催された中共六全大会で総書記に就任したばかりの向忠発に孫逸仙大学で「江浙同郷会は蒋介石と結び、経済援助を受け、仄聞するところによれば日本領事館とも結託している」から「必ずその組織を壊滅しなければならない」と演説させて多くの学生を逮捕、除名したので、学内は大混乱に陥った<sup>59</sup>。事件が拡大するにつれて王明のセクト主義に対する恐怖が怒りに転じ、ソ連共産党監察委員会などに厳正な調査を依頼する声が高まり、監察委書記のヤロスラフスキーが孫治方、俞松秀、董亦湘、周達明を同席させ、第一通報者の王長熙に真相を問いただしたところ、王は「彼らが江蘇・浙江方言で話しているのを聴いただけだ。冗談のつもりで江浙の連中が同郷会を開いていると言っただけです」と答え、孫治方、俞松秀、董亦湘、周達明らも「仲の良い友人と食事をしていただけで、いかなる政治活動もしていない」と釈明した。また、中共六全大会後にモスクワに来ていた周恩来も孫逸仙大学に赴き、多くの学生から「事件」について聴取し、最終的に「孫大に江浙同郷会は存在しない」と断定して紛糾は終息した。<sup>60</sup>

「江浙同郷会」事件は蔣経国の立場に立ってみると、中共モスクワ支

---

59 前掲岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」『中国月報』Vol.46 No.4 (No.530) 14頁参照。

60 前掲岸田五郎「モスクワにおける王明の抬頭と江浙同郷会事件」『中国月報』Vol.46 No.4 (No.530) 14～15頁参照。

部から組織的に狙われ、攻撃を受けた初めての体験だった。また、ソ連共産党あるいは国家政治保安部（GPU）などソ連国家を支える組織の闇の部分に触れた、やはり最初の経験であった。そして、その後の約10年にわたる留ソ期間を通じ、程度の差はあったものの蔣経国の帰国を阻み、ソ連生活を脅かす中共、ソ共、コミンテルン、GPUなどの影は終始つきまとっていた。それは多くの場合、経国を窮地に追い込み、苦しめてきたのだが、その苦境の中で経国は共産党が組織を統治する方法や敵対勢力（あるいは個人）を攻撃するノウハウを学び、同時に秘密警察の手法に知悉していったといえよう。このことはモスクワから帰国後、とくに台湾へ遷占した後の国民党、国民政府が秘密警察組織を陰の土台として、「大陸反攻」をお題目に据えた台湾の「国体」を護持していくうえで蔣経国に大きな優越性をもたらした。国民党・国民政府内には、蔣経国以上にこの方面に秀でた人材がいなかったからだ。それは父親蒋介石すら予期していなかった、台湾統治を支える大きな闇の勢力となったのである。

### 3、入党と党籍剥奪

蔣経国が孫逸仙大学に入学した際に大学側が作成したロシア語の書類には「1925年10月に国民党入党」と記されている<sup>61</sup>。経国の回想録にも同様のことが書かれている<sup>62</sup>。ところが、国民党員のはずであった経国は、孫大では国民党の活動にはほとんど参加せず、もっぱら中共との往来が頻繁だった。ロシア文献センターの『孫逸仙大学の国民党及びその傘下機関名冊と国民党同志工作調査表』にも蔣経国の名前を見つけるこ

---

61 ロシア文献センター、総ファイル530／目録1／ファイル14／54頁。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」120頁より再引。

62 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」218頁。



とはできない<sup>63</sup>。そして驚くべきことに、当時、父親である蒋介石は蔣経国が留学に出発する直前、林煥庭の紹介を受け、上海で国民党に宣誓・入党した<sup>64</sup>事実を知らなかった。蒋介石は書簡で次のように述べている。

お前は国民党ではなく、いま共産党に入り、共産主義をお前の事業とし、革命をお前の生涯となした。父は共産党に入党したことはなく、純粹の国民党員であるが、みずからの一生の事業を革命と心得ている。つまり、私たち父子は終始革命の戦線に立って奮闘するのである。私はお前に対しては父であるが、革命事業においては一人の同志であり、父はそのことに満足している<sup>65</sup>。

この書簡は1926年3月16日に認められたものである。書簡の文面からは、蒋介石の共産党に対する不信が感じられない。むしろ中国共産主義青年団に入団した経国を革命の同志として扱い、激励している。蒋介石を反共の第一歩に走らせた中山艦事件は、この書簡が出された直後の3月20日に発生している。これより1ヵ月半ほど前、2月1日に蒋介石から経国に宛て認められたもう1通の書簡を見てみよう。

気力、見識、学問、勇気を備えた聡明で強い革命家になり、我が党の後継となれ（中略）ロシアにあっては必ずその時々の時勢と潮流を掴み、常に向上することを心がけ、とくに民衆の利益を重

---

63 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」120頁。

64 蔣経国先生全集編輯委員会編『蔣経国先生全集（記事年表上輯）』（行政院新聞局，1992年）28頁。

65 『蒋介石が蔣経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター，総ファイル530／目録4／ファイル49／91～92頁，1926年3月16日）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」120頁より再引。

視し、己の一切の幸福を犠牲にして、国際プロレタリア階級の解放を第一務とすべきである（中略）いずれの党に入ろうとも、それはお前の心の赴くままにすればよい。余はあれこれ強制しない。しかし革命は急進させなくてはならず、革命の性ある団体を重要とする。<sup>66</sup>

1925年10月の上海における蔣経国の国民党入党は、孫逸仙大学への留学資格を満たすための便宜的な処置だったのだろう。ソ連共産党と国民党が運営した孫大に入学するためには、国民党籍が必要だったのだ。いずれにしても蔣経国は父親のお墨付きともいえるこれら2通の激励書簡に勇気付けられ、共青团の活動を通じて急速に左傾していく。この時期の経国が思想的に国民党員になっていたとは考えにくい。中共が主体になって組織した五・三〇事件を頂点とする反帝愛国運動への積極的な参加、北京で李大釗ら中共北方区委が組織した北京5万人反帝示威運動への関与などの行動からみるかぎり、どちらかと云えば思想的には「共産」であったというべきだろう。

国民党の活動には見向きもしなかった蔣経国だが、共青团の活動には積極的に係わっている。以下に列記してみると、孫逸仙大学倶楽部書記、副主席を務め、同倶楽部の政治委員主席や活動組員にもなっている。さらには少共小組宣伝部特別委員印刷委員などである<sup>67</sup>。「少共」とは少共国際＝青年共産国際とよばれるもので、青少年をコミンテルンの活動に収斂していくための組織と思われる。少共小組宣伝部特別委員印刷委

---

66 『蒋介石が蔣経国に宛てた書簡』（ロシア文献センター、総ファイル530／目録4／ファイル49／86～87頁、1926年2月1日）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」119頁より再引。

67 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」121頁参照。

員とは、経国が回想録の中で言及している壁新聞「紅牆」のことだろう<sup>68</sup>。経国はこの壁新聞に『革命必先革新』などの評論を寄稿していた。

少共小組の活動の中に、まだ年少だった故に犯した蔣経国の失敗などを垣間見ることができ、当時の経国の人となりとうかがうことができ、興味深い。ある時期、少共小組の組長だった高維翰は経国の性格について「怒りっぽく、無駄口が多い<sup>69</sup>」と評している。また、大学党部の蔣経国に対する評価は「教育水準は中等程度、よく訓練されたマルクス主義者、規律を守り、十分に活動的だ。年齢の若さに起因する軽率さがみられる<sup>70</sup>」となっている。経国はある日、会議で組長と言い争いになり、そのことについて共青团組織部に自省の書簡をしたため、級友から「会議を混乱させ、クラスを搗乱し、学習態度が散漫、積極分子としての責務を忘れている」と批判されたことを悔い、「個性が強く、計画的な学習が不得手」であるので適切な指導を受けられるよう組織部に求めている<sup>71</sup>。

レニングラードにあるトルマトコフ軍政学院に入学した翌年の1929年2月以来、蔣経国は数度にわたりソ連共産党への入党申請を出している。同年10月、軍政学院特別班支部は経国の入党申請に関する党員会議を開

---

68 前掲蔣経国「我在蘇聯的生活」2頁。前掲『蔣経国先生全集（記事年表上輯）』（行政院新聞局，1992年）28頁。

69 『組長報告』（ロシア文献センター，総ファイル530／目録2／ファイル122&125，『党員及び団員工作調査表』（総ファイル530／目録38／ファイル20／9頁など。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」121頁から再引。

70 『孫大露共支部書記シトニコフが蔣経国に与えた評価』（ロシア文献センター，総ファイル530／目録1／ファイル77／44頁，1926年）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」111頁より再引。

71 『蔣経国が少共委員会組織部に宛てた書簡』（ロシア文献センター，総ファイル530／目録2／ファイル125）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」121頁より再引。

き、席上、経国の友人で先にソ共黨員になっていた劉鳴先は経国の入党に反対はしなかったが「新規定では5人の申請紹介者の中に少なくとも3人の工場労働者を含むことが求められているが、蔣経国の紹介人はその条件を満たしていない。このことは後に全学会議あるいは黨員会議で問題になる恐れがある」と指摘している。出席者の大多数は、経国の学習態度、対人関係が良好なため入党に賛成した。1～2人が、経国の「政治的立場」が曖昧なことを危惧した。もう1人は、経国が中国で工作経験がないので申請を保留にすべきだと主張した。紹介者の1人ゴージェスは入党を認めるか否かは「プロレタリア階級のために戦えるかどうかで判断すべきである。エリザロフ（経国）の出身階級はプロレタリア階級ではないが、もう子供ではない。彼は優秀な同志であり、彼を党外に放置すべきではない」と補足した<sup>72</sup>。これらの意見に対して経国は次のように応えている。

私が誰とともに歩むのか、家族かそれとも共産党か。この問題はすでに決着がついています。中国共産党もしくはソ連共産党に入党する件について、秋白同志は私が候補黨員になることに同意しています。私の将来の帰国問題について、秋白同志は私が今後一年間ここに残留し、工場で学習・工作することに賛成しました。私は帰国を恐れてなどいません<sup>73</sup>。

最後に劉鳴先が以下のように締め括った。

---

72 『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』（ロシア文献センター、総ファイル550／目録1／ファイル6／60頁b, 18～21頁, 1929年10月21日）。前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」126頁より再引。

73 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』, 前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」126頁より再引。

私はエリザロフと知り合って久しく、上海から一緒にモスクワへ来た仲間です。孫大でも2年間をともにすごしました。私は彼の共産主義の進歩が速いことを知っています。速いがために途中で多くの過ちを犯しました。反動派<sup>74</sup>のまちがいもそうです。15回大会後、彼は党に意見書をしたため、みずからの過ちを認めました。軍政学院での2年余、彼は過去のまちがいを繰り返していません<sup>75</sup>。

党員会議は決議の結果、蔣経国の候補党員資格に4人が賛成し、1人が反対したため、学院党員大会の議論に委ねることになった。同年11月2日に開かれた学院党員大会では劉鳴先がまず「蔣経国は10月16日、ソ連共産党候補党員資格を申請し、特別班主席団はこの書類が示すように彼の候補党員資格を承認し」たことを報告した。その後、①党が蔣経国に帰国を求めたら帰国するのか否か、②今後、父親としての蒋介石に如何に対応していくのか、帰国後は家族関係を維持していくのか、③反動派との関係はどうなっているのか、なぜ経歴書に反動派に加わったことを書かないのか、などの質疑が出された<sup>76</sup>。これに対して経国は次のように説明している。

党が帰国を求めたら、私は当然党の指導の下に帰国します。蒋介石は当然のことながら敵であります（中略）反動派の件については申し訳なく思っています。私はプロレタリア階級出身ではない

---

74 「反動派」は、トロツキー派のことを指している。

75 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』、前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」126頁より再引。

76 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』、前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」127頁より再引。

ので、当然、多くの非プロレタリア思想を身に着けていました。だから、知らぬ間に反動派と関係を持ってしまったのです。（現在）家庭とは何らの関係も有していません。李大釗との関係については、彼がモスクワ留学を紹介してくれたのです。なぜ、少共に入らなかったのか。あのころ私は15歳で、子供でした（中略）私は非プロレタリア階級出身なので、自覚が低かったのです。同志の皆さん、今後2年間の候補期間を見ていてください<sup>77</sup>。

こうして蔣経国が求めたソ連共産党の候補党員資格は、学院党員大会においてソ連共産党員の賛成12票、中国共産党員の賛成25票、反対1票で承認された。翌1930年3月28日、ソ連共産党レニングラード軍区委員会は経国の候補党員資格を正式に認めた<sup>78</sup>。当時、中国共産党員がソ連共産党に入党する場合、一般的には1段階下げされるのが常だった。中共党員はソ連共産党への入党初期においては候補党員としてしか認められず、一定期間の観察期間が設けられた。蔣経国はソ連で「反革命の大罪人」の汚名を持つ父親蒋介石という大きなハンディを抱えながらも中国共産主義青年団員からソ連共産党候補党員に昇格することができた。

蔣経国が上で述べているように候補党員期間は一般的に2年間が目安だったようだが、経国はその後の流転の中で党員に昇格することはなかった。1936年9月、ソ連共産党ウラル党委員会によってウラル重機械工場の助理（補佐）工場長と『重工業日報』の編集長の役職とともに、候補党員の資格も剥奪された<sup>79</sup>。1925年12月、孫逸仙大学に入学してわ

---

77 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』、前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」127頁より再引。

78 前掲『軍政学院特支主席団第二次会議速記録』、前掲余敏令「俄国档案中的留蘇学生蔣経国」127頁より再引。

ずか数週間で共青团に入団して以来の共産主義者としてのステータスを喪失したのである。このことが、ソ連滞在に区切りをつけて帰国を決意させるきっかけになった。実際に帰国が実現したのは翌年4月で、蔣経国の個人的な願望とはまったく別のレベルで、西安事変を国共両党の一致抗日の好機と見たスターリンの思惑が濃厚に左右したことは説明するまでもない。

## おわりに

本稿の考察を終えて、以下の4点を明らかにすることができた。

第1点は、蔣経国のソ連における恋情はこれまでの研究でつまびらかにされてきたファイナ（中国名：蔣方良）との関係だけでなく、馮玉祥の長女、馮弗能との間にも濃密な交流があったこと。そして、その恋は蒋介石が発動した4・12上海クーデターの大波をかぶって政治化し、苦恋に終わったという事実だ。さらに2人の恋が破綻した原因は、政治的な自覚が高くなかった弗能の存在を共青团が嫌い、上海クーデターで苦境に陥った蔣経国が彼女との関係を清算したことにあった。蔣経国は馮弗能との関係を終わらせることで共青团の好感を調達し、難局を乗り切って保身を図ったのである。

第2点は、蔣経国が孫逸仙大学を卒業後もソ連に止まったのはソ連当

---

79 前掲蔣経国「我在蘇聯的日子」244頁参照。一方、張日新他著『青年蔣経国』（中国・花山文芸出版社、2002年）76～77頁の記述によれば、経国は1936年11月16日にウラル重機械工場党委員会に対し候補党員から正式党員への格上げを申請し、12月7日に認められてスヴェルドロスク区ソビエト組織部の副部長に昇進し、その後に内政部の監視がついたが、西安事変の進展の中で帰国を許され、ソ連共産党における党籍は自然消滅したことになるが、典拠が示されていない。本論は蔣経国が回想録「我在蘇聯的日子」に記した内容に基づいている。

局と中共モスクワ支部から帰国許可が下りなかったという事実もあったが、経国側の事情として、反共に転じた父親蒋介石をメディアを通じて公開批判してしまった手前、そう簡単には帰国に踏み切ることができず、ソ連に残留して勉学をつづけ、父親との和解の好機を待つという打算があったということ。

第3点は、上海クーデターをきっかけにして、孫大がスターリンとトロツキーの中国問題をめぐる路線闘争に巻き込まれて紛糾し、その争いの中で大学からトロツキー派を一掃しようとする王明一派＝「28人のボルシェビキ」が第3代学長ミフの後ろ盾で台頭してきたこと。あわせて王明が経国を追い詰めるために起こした「江浙同郷会」事件が、じつは根も葉もないでっち上げだったことである。

第4点は、蔣経国が孫逸仙大学に留学するため、1925年に上海で国民党に入党していた事実を蒋介石が知らなかったこと。そして、蒋介石自身は上海クーデター以前までの段階で経国が国民党、共産党のいずれに入党することも経国の自由意志に任せていたことを明らかにすることができた。また、蔣経国の在ソ12年間における共青团入団、トロツキー派への参加と離脱、ソ連共産党への入党と党籍剥奪の過程を敷衍できたことである。

蔣経国の12年に及んだソ連経験は、その後の経国自身の人生行路に深くコミットすることになる。それは帰国後、江西省の贛南で展開したソ連式のユートピア的な社会改造運動や、台湾占遷後に秘密警察を掌握して蒋介石の台湾統治を裏から支えた一連の闇の行動などに色濃く反映されている。その意味で、蔣経国の在ソ期間における軌跡を詳細に検証していくことは、蔣経国研究をさらに発展させるための必要条件であり、そのことは台湾現代史を検討していく上で達成されなければならない重要な課題ともいえる。